

平戸の琉球いも

熱帯農業研究センター
加 藤 眞次郎

ウィリアム・アダムス（三浦按針）は日本に來た最初のイギリス人で、徳川家康の外交顧問として知られている。アダムスは、1598年オランダの東洋遠征船隊に航海長として参加したさい、乗船していたリーフデ号がマゼラン海峡付近で漂流、1600年に豊後にたどり着いた。その後アダムスは、船長代理として大阪に行き家康と会見する。彼は家康の側近として厚遇を得、知行地を下付された。平戸のイギリス商館設立に尽力し、朱印船貿易家としても活躍した。1620年平戸で死去したのは57才の時だった。

イギリス商館長リチャード・コックスはアダムスを伴って、1617年8月24日徳川秀忠のもとを訪れ、ヨーロッパ船の寄港地を長崎と平戸に限った法令の緩和・撤廃を請願し、新たに朱印状を下付させることが目的だったが、果たすことができずに終わった。こののち、イギリスの対日貿易は、秀忠政権による貿易統制、さらにはヨーロッパ諸国との商戦に負けて窮地に追い込まれる。

その頃、ウィリアム・アダムスが船長として乗船した平戸イギリス商館の朱印船シー・アドベンチャー号は琉球に漂着するが、アダムスはその折り中国より伝来したばかりの甘藷を入手し、栽培の方法を習い、長崎県平戸に持ち帰った。彼は1615年6月2日にリチャード・コックスへ甘藷を贈ったところ、コックスは6月19日、寺院所有の庭を借り甘藷を植えている。コックスは克明に日記を付けており、この日時は正確なものである。これが甘藷をわが国で栽培した最初の記録である。寺院が導入作物の試験栽培の場所となっており、1698年に琉球から甘藷を取り寄せ種子島に試植したのも下石寺と言う寺院であることから、当時は寺が小規模な農業試験場を果たしていたものと推察される。1618年、コックスはイギリス商館の琉球駐在員から甘藷を平戸に送ってもらい、7月29日に平戸市街から5 km程はなれた千里ヶ浜に接す

る山手の畑（川内浦に近い鳶巣と言う所）に甘藷500個を植えたことが日記に記載されている。内地で最初に甘藷が植えられた畑であるといわれていることから、県指定史跡「コックスの甘藷畑跡」となっている。鳶巣の地質は、砂地で甘藷の栽培に適した所である。この畑を3月に訪ねたが、作物が一部だけ栽培され、だいぶ荒れていた。上空には鳶に代わりカラスが鳴いていた。当時の栽培法は、「トンボ植え」といわれ最近まで一部に伝わっていた。「トンボ植え」は、芽を出した種藷を逆さまにして半分を土中に、半分を地表に出して埋める。あたかもトンボの尻を出した形に植えることから名付けたのであろう。また、この地方では甘藷の導入源が琉球であるため、甘藷を「琉球いも」と呼び親しんでいる。

長崎には、昔ながらの甘藷の加工品がいくつかあるので紹介しよう。

かんころ餅：さつまいもの素朴な甘味を生かしている餅。大は400 g位で小は280 gの細長い餅で、食べる時は5 mmくらいの厚さに切って、オーブントースターなどで弱火で焼いて食べる。

芋の粉：芋の粉からダンゴをつくりますが、色の黒いシコシコしたダンゴです。冷めたらカチカチで、硬くて食べられません。島原名物の「六兵衛」は、これで作られます。

芋ようかん・ほし芋（別名いもするめ）：全国的に普及しているので、この2つは省略します。

▶長崎県指定史跡「コックスの甘藷畑跡」

